

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：34414

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770055

研究課題名(和文)「モデル」の変容 ブルゴーニュ公の祈祷者像と初期フランドル絵画

研究課題名(英文) Transformation of "Model": the Prayer Portraits of the Dukes of Burgundy and Early Flemish Paintings

研究代表者

今井 澄子 (IMAI, Sumiko)

大阪大谷大学・文学部・准教授

研究者番号：20636302

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ブルゴーニュ公の祈祷者像が初期フランドル絵画の祈祷者像の「モデル」として担った役割を、自己称揚と均衡の観点から検討した。作例のリスト化、および図像・機能の分析からは、(1)フィリップ善良公の祈祷者像では公の権威が強調されるのに対して、後継者シャルル突進公の祈祷者像では均衡の表現も重視されていたこと、(2)初期フランドル絵画の祈祷者像表現にも、自己称揚から均衡へと至る変容が見られること、(3)とくに15世紀後半の初期フランドル絵画の祈祷者像がブルゴーニュ公の祈祷者像表現を取り入れていることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study considers the role of the prayer portraits of the Dukes of Burgundy as an ideal "model" of early Flemish paintings in terms of "self-admiration" and "balance." For this purpose, we listed the prayer portraits of the Dukes of Burgundy, mainly Philip the Good and Charles the Bold, and examined their iconographies and functions in comparison with Flemish prayers portraits. In consequence, we have observed that the prayer portraits of Philip the Good remarkably admire his own status, while those of Charles the Bold consider the balance with sacred persons. Moreover, similar transition can be found among the prayer portraits of early Flemish paintings concerning the representation "self-admiration" and "balance." Therefore, we have reached a conclusion that early Flemish paintings adopted and modeled the transformation of prayers portraits of the Dukes of Burgundy.

研究分野：美術史

キーワード：美術史 フランドル ネーデルラント ブルゴーニュ 祈祷者 肖像 パトロネージ

1. 研究開始当初の背景

アルプスの北方で15世紀に栄えた初期フランドル絵画には、宗教画の注文主が崇敬対象に祈る姿(祈禱者像)が多く描かれた。この時代に祈禱者像が人気を博したのは、同地が中世から近世へと移行する転換期にあり、「聖」と「俗」の交差するルネサンス的な新しい精神が出現したためと考えられる(Erwin Panofsky, *Early Netherlandish Painting*, Cambridge, 1953)。

祈禱者像は本来、注文主の敬虔さを示すものであるが(「聖」)、初期フランドル絵画はそこに留まらず、祈禱者を聖人と同じ大きさ・空間に描き、注文主の富やステータスを誇る側面が顕著である(「俗」)。後者は「自己称揚的(self-admiring)」と呼ばれる要素である。

研究代表者はまず、初期フランドル絵画の祈禱者像の聖なる側面に注目し、その成立事情を注文主の信仰形態との関連で探究してきた。とくに俗の側面については、注文主たちの「モデル(模範)」となる存在として、フランドルの地を支配した三代目ブルゴーニュ公フィリップ・ル・ボン(善良公、在位1419-67年)の自己称揚の表現を指摘した(拙論「信心のモデル、自己称揚のモデル ブルゴーニュ公フィリップ・ル・ボンの祈禱者像と初期フランドル絵画」『大阪大谷大学紀要』第48号、2014年、1-21頁)。

ただし、フィリップ善良公の祈禱者像の特徴は、祈禱者を大きく強調するという自己称揚的な描写のみからでは説明できない。そこには、信徒としての敬虔さ・適切さに配慮し、祈禱対象との均衡をはかるような表現もみられる。興味深いことに、この「均衡」の側面は、初期フランドル絵画の祈禱者像にもうかがえるように思われる。

このような状況に鑑みるに、自己称揚に加え、「均衡」という視点を加えることによって、初期フランドル絵画の祈禱者像の「モデル」の全体像が明確になると考えるようになった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、初期フランドル絵画の「モデル(模範)」となったブルゴーニュ公の祈禱者像が、その役割を「自己称揚(self-admiration)」から「均衡(balance)」へと変容させたことを明らかにすることである。そのために、まず、フィリップ善良公の祈禱者像では自己称揚が、四代目の公となったシャルル突進公(在位1467-77年)の祈禱者像では均衡が重視されたことを明らかにする。つぎに、初期フランドル絵画の祈禱

者像にも、自己称揚から均衡へと至る変容が見られることを示す。そして、ブルゴーニュ公と初期フランドル絵画の祈禱者像を比較し、初期フランドル絵画の祈禱者像がブルゴーニュ公の祈禱者像の変容を取り入れていることを示したい。

3. 研究の方法

本研究では、ブルゴーニュ公の祈禱者像が初期フランドル絵画の「モデル」として担った役割を解明するため、包括的な作品調査を行った。

まず、ブルゴーニュ公と初期フランドル絵画の祈禱者像のリスト・アップを行った。作業にあたっては、ブルゴーニュ公シャルル突進公の祈禱者像を中心に、肖像・擬装肖像なども含めた新しい作例の収集と整理につとめた。

また、アムステルダム、ハーグ、ディジョン、ボーン、ストラスブル、ジュネーヴ、ベルン、エディンバラ、マドリード、サラゴサの美術館・教会・図書館に赴き、初期フランドル派の画家ハンス・メムリンクの制作した祈禱者像や、シャルル突進公の表象を読みこむことのできるタペストリーなどの重要作品の実見調査と、関連文献の史料調査を行った。

つぎに、フィリップ善良公からシャルル突進公へと至る祈禱者像の特徴を「自己称揚」と「均衡」の視点から分析した。あわせて、ジョルジュ・シャトランやジャック・ド・クレルクなどの当時の年代記者たちによる記述、およびブルゴーニュ公の所蔵した書物・美術コレクションを調査し、ブルゴーニュ公の自己称揚への意識と均衡への配慮がうかがえる箇所を探究した。

そして、ブルゴーニュ公と初期フランドル絵画の祈禱者像について、自己称揚と均衡の観点から包括的な比較・分析を行った。

4. 研究成果

(1) 四代目ブルゴーニュ公シャルル突進公の祈禱者像をリスト・アップした。その結果、シャルル突進公の祈禱者像のみならず、奉獻像・擬装肖像・献呈図像など、祈禱者像に類似する参考作例を含めた包括的なリストを作成することができた。とくに、シャルルの容貌で表わされた聖ゲオルギウスや聖アンドレの描写が、本研究の視点を深める重要な表現として見いだされた。(業績〔雑誌論文〕)

(2) (1)で作成したリストを活用して、ブルゴーニュ公フィリップとシャルルの祈禱者像の分析を行った。その結果、フィリップ善

良公の肖像・祈祷者像には、構図に占める位置や天幕・紋章などのモチーフ、そして登場回数などに自己称揚の要素が顕著に認められた。それに対して、シャルル突進公の祈祷者像には、フィリップの自己称揚の表現を踏まえつつも、祈祷対象に従属し均衡をはかるような伝統的で控えめな表現が強いことがうかがえた。

シャルル突進公の服装は、フィリップ善良公が描かせたような黒色の衣服と比べると多様であり、装飾も多い。さらに、ゲオルギウスなどの聖人に自身を重ねる二重肖像の表現もうかがえる。この二点は、シャルル突進公の独自の自己称揚とみなすことのできる特徴であり、本研究により得られた大きな成果でもある。(業績〔雑誌論文〕)

(3) シャルル突進公が理想とした支配者像について検討した。まず、シャルル突進公の外観や性格を推し量るために、フィリップ・ド・コミーヌなどの年代記作者たちによるシャルル評を調査した。その結果、シャルルが歴史上の支配者を自身の「モデル」としていたことが確認できた。

また、「とても仰々しい」装いを好んだシャルルが所蔵した美術作品の検討からも、同様の志向が見いだされることが分かった。このように「モデル」を重ねることで自身の権威を強調するという態度は、ブルゴーニュ公が注文したタペストリーにも顕著にうかがえる。本研究では、その典型例として、シャルルとマーガレット・オブ・ヨークの結婚式の祝宴(1468年)に飾られた《エステルズのタペストリー》や、シャルルと神聖ローマ皇帝との会合(1473年)の場に展示された《カエサルズのタペストリー》などに注目し、各作品が観賞者へ及ぼしたであろう効果を明らかにした。(業績〔雑誌論文〕 、〔学会発表〕 、〔その他〕)

(4) 初期フランドル絵画の祈祷者像について、個々の調査・分析を進めるとともに、ブルゴーニュ公の祈祷者像との比較・検討を行った。通時的かつ包括的に分析したことにより、ブルゴーニュ公フィリップ善良公から後継者シャルル突進公へと至る祈祷者像において、祈祷対象との均衡をはかりながら変容するという過程が、15世紀後半のハンス・メムリンクの作品において多様に展開する初期フランドル絵画の祈祷者像の方向性と対応しているということが明らかになった。(業績〔雑誌論文〕 、〔図書〕 、〔その他〕)

初期フランドル絵画の「モデル」としてブルゴーニュ公の祈祷者像が担った役割についての研究成果は、単著としても刊行した

(『聖母子への祈り 初期フランドル絵画の祈祷者像』国書刊行会、2015年)。同書の研究は、公益財団法人 花王芸術・科学財団の「平成27年度第10回美術に関する研究奨励賞」を受賞した。(業績〔学会発表〕 、〔図書〕 、〔その他〕)

以上の研究成果から、1)フィリップ善良公の祈祷者像では公の権威が強調されるのに対して、シャルル突進公の祈祷者像では均衡の表現も重視されていたこと、2)初期フランドル絵画の祈祷者像表現にも、自己称揚から均衡へと至る変容が見られること、3)とくに15世紀後半の初期フランドル絵画の祈祷者像にブルゴーニュ公の祈祷者像表現が取り入れられていることが明らかになった。

本研究により、ブルゴーニュ公の祈祷者像は、中世末期のヨーロッパの支配者が、美術の図像表現を先導した重要な例として位置づけることができる。また、一連の研究を行う中で、ブルゴーニュ公の表象と利用のあり方が、フランドル絵画だけでなく、他のヨーロッパ地域へも影響を及ぼした様子うかがえた。今後はこの問題をさらに深く調査・研究していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

Sumiko IMAI, "Placement and Functions of Jan van Eyck's *Rolin Madonna*," 『大阪大谷大学 歴史文化研究』第17号、2017年、1-22頁。(査読無)

今井 澄子、「《カエサルズのタペストリー》の政治的効果—ブルゴーニュ公シャルル・ル・テメレールのイメージ利用をめぐる考察—」『西洋中世研究』No.8、2016年、41-61頁。(査読有)

今井 澄子、「つかの間の青春—《ショーモン・タペストリー》(一五〇〇~一五年頃)のメッセージ—」『美術フォーラム21』vol.33、2016年、29-34頁。(査読有)

今井 澄子、「ブルゴーニュ公シャルル・ル・テメレールの祈祷者像」『大阪大谷大学 歴史文化研究』第16号、2016年、1-20頁。(査読無)

今井 澄子、「西洋のキリスト教美術における「天国」—《ポーヌの祭壇画》の肖像表現を手がかりに—」『論集 他界観(大阪大

谷大学歴史文化学科 調査研究報告書 第2冊』2016年、78-102頁。(査読無)

Sumiko IMAI, « Saint Luc peignant la Vierge de Rogier van der Weyden: Une innovation dans le contexte du portrait « déguisé » chez les Primitifs flamands », *Bulletin of Osaka Ohtani University*, 50, 2016, pp. 101-125. (査読無)
<http://id.nii.ac.jp/1200/00000124/>

今井 澄子、「《エステル・タペストリー》の政治的役割 ブルゴーニュ公シャルル・ル・テメレールの結婚式(1468年)におけるイメージ戦略をめぐって」『大阪大谷大学歴史文化研究』第15号、2015年、1-27頁。(査読無)

[学会発表](計3件)

今井 澄子、「初期フランドル絵画の祈祷者像」花王芸術・科学財団、2016年4月18日、パレスホテル東京(東京都・千代田区)。

今井 澄子、「初期フランドル絵画の祈祷者像 「同一パネル内で聖母子へ祈る祈祷者」とそのモデルをめぐって」ネーデルラント美術研究会、2015年7月25日、清泉女子大学(東京都・品川区)。

今井 澄子、「《エステル・タペストリー》の政治的役割 ブルゴーニュ公シャルル・ル・テメレールの結婚式(1468年)におけるイメージ戦略をめぐって」美術史学会西支部例会、2014年9月20日、大阪大学(大阪府・豊中市)。

[図書](計3件)

今井 澄子、あいな書房、「神から人へ 聖家族 表象の変容 ロベール・カンパンからレンブラントへ」尾崎彰宏監修解説『北方近世美術叢書 II ネーデルラント美術の光輝 ロベール・カンパンから、レンブラント、そしてヘリット・ダウへ』2017年、21-50頁、215-218頁。

今井 澄子、あいな書房、「救いへといたる道、あるいは宮廷的なイメージの戯れ 《虚栄と救済の多翼画》に見るメモリンクの創意」尾崎彰宏監修解説『北方近世美術叢書 I ネーデルラント美術の魅力 ヤン・ファン・エイクからフェルメールへ』2015年、49-88頁、282-287頁。

今井 澄子、国書刊行会、『聖母子への祈り 初期フランドル絵画の祈祷者像』2015年、全376頁。

[その他](計6件)

研究活動の紹介

http://www.osaka-ohtani.ac.jp/department/teacher/cultural_assets/cu_imaish.htm

花王芸術・科学財団 平成27年度(第10回)美術に関する研究奨励賞 受賞の紹介
http://www.kao-foundation.or.jp/award/art/result/h27/h27_report02.html

今井 澄子、「フランドル美術の魅力」株式会社ワールド航空サービス美術講座、2017年1月29日、ワールド梅田スカイサロン(大阪府・大阪市)。

今井 澄子、「西洋における聖母マリアのイメージ」大阪大谷大学公開講座『聖なるもののイメージ』2016年10月29日、大阪大谷大学(大阪府・富田林市)。

今井 澄子、「西洋絵画にみる聖と俗 初期フランドルの祈祷者像」大阪大谷大学公開講座『「聖」と「俗」のイメージ』2015年7月3日、大阪大谷大学ハルカスキャンパス(大阪府・大阪市)。

今井 澄子、「美術で読み解くブルゴーニュ公国の歴史文化」はびきの市民大学講座『歴史文化の世界』2014年11月20日、はびきの市民大学(大阪府・羽曳野市)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今井 澄子 (IMAI, Sumiko)
大阪大谷大学・文学部・准教授
研究者番号: 20636302

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし